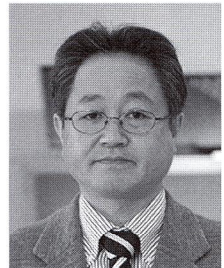




樺細工と伝統

有限会社富岡商店
代表取締役社長

富岡 浩樹



1971年（昭和46年）公開の「レッド・サン」という異色の西部劇映画をご記憶だろうか？ チャールズ・ブロンソン、アラン・ドロ、そして、三船敏郎という豪華キャストで、監督はテレンス・ヤングである。物語は、日米

修好のためにアメリカへやってきた日本大使一行が、大陸横断鉄道でワシントンへ向かう途中、強盗団に襲われ、天皇から大統領へ献上する宝刀が奪われてしまう。これを奪回する任務の三船と、強盗団に裏切られ、財物を取り返そうとするブロンソンの奇妙な二人旅がはじまる。

日本での公開当時「こんな歴史的事実はない」と不評であったらしい。しかし、さすがは鬼才テレンス・ヤング、三船の台詞には新渡戸稲造の、あの「武士道」の精神が織り込まれているのである。

滅びゆくものの哀愁と誇り、そして潔さがみごとである。この歴史を背負った武士が、まるで歴史のない国で活躍することの違和感もまたみごとなのである。アメリカなるものの姿をチャールズ・ブロンソンに仮託している。ブロン

ソンは、土地と時間が結びついた、つまり、一般的な歴史としての中世を経験していないアメリカの象徴であるが、彼には、旧大陸から移入された中世的記憶と、伝統に対する無知が共存しているのである。

例えば、数百年の歴史を持つ伝統工芸の品々を普通に使う、ということを当たり前としているのは、世界でも日本人ぐらいではないか？

中でも、秋田・角館の樺細工は、武士のクラフト（工芸品）として発達した珍しい経歴がある。いわゆる武士の副業が始まりである。だから、この製品の購入層は一般向けではなかったろう。

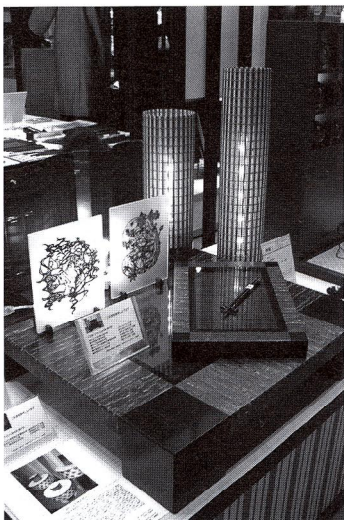
日用品として、多くの伝統的な製品は完成度が高く、むしろ芸術の域にまで達しているものが多い。樺細工も同様で、美しさのほかに耐久性を備えているから、常識的な使い込みなら100年以上は保つ。また、職人も継承されるから、補修も可能、と考えると、何年使える道具かわからないほどになる。

間違いなく、生活に密着した高級品が伝統工

芸として残ったのである。一方で、時代をさかのぼれば、伝統工芸品もどこかで「新製品」だったときがある。現在に残るこれらの作り手と買い手の関係のバランスはどうだろうか？

使い捨てが重宝されるのは、大量消費社会となつてからであるから、せいぜいここ100年ぐらゐの習慣である。むしろ、この間に、生活の伝統が失われ、伝統工芸として作り出されるものが浮世離れしてしまっている。日本もアメリカナイズされてしまった、といわれて久しいが、それは中世的記憶と伝統への無知という点で正しいのかもしれない。

武道が精神性を残しながら、スポーツとして生き延びているように、伝統工芸も、武士のクラフトとしての精神性を残しながら、日用品として生き延びてゆくために、現代の生活に彩りや潤いを与える、高品位なクラフトとして新たな挑戦をしているのである。



樺細工・大阪金剛藤・硝子のコラボレーション
(デザイナー・小澤盛男)